森川町より

櫻欄の葉が快くかざした入口、なつかしい南洋の情調が浮ばないでもない。私は心からこの家が好きになつた。多くの下宿屋の中に特出して見るから快い三階建の偉大な姿、n先生の所謂八面玲瓏。そして其内容を充實させて居るのは百人近くの若い人達。朝になれば此の重い硝子戸をあけて、若い銀杏の青濁るアスハルトの道を一心に歩む。そして又落日かげる夕の町の情調に浸されながら歸つて來る。この町の王者の樣なこの私共の家は、疲れて歸つて來た人達を暖く抱擁する、歴史の淺い此家にはまだきまつた情調といふものがない。私達は美しい堅實な森川町氣質を作りたい、みんな特性を發揮させながら、之を統一する全体としての力、その大きな力を以て日々に明るい方へ進んで行きたい。

×

月曜の晩は先生がいらつしやる。多角形のお居間は先生を中心として若い人達を吸引する。其夜のタングステンは殊に明るい。此前の晩は新茶の香に醉ひながら「夢」の話に花が咲いた。論はプラクテカルとロンマテックとの二つに分れたのであつた。

食堂は小石川の青葉が光る西向きの一棟、可愛く仕切られた八つの室がそれである、小人數で、ちんまりと靜かに頂けるのは何となしに家庭的の情味を思はせる。三崎旅行を羨んだり、關西旅行の雨の心配をしたり、暑中休暇までの日數を數へたりするのもこゝである。夜は英語豫習の人達で繁昌する。

×

土曜日は技藝科四年の人々がお献立をしておいしいお料理をして下さる事になつた。とも知らぬ一人は、土曜の夜の缺けた献立表を見て「今夜は斷食?」と書いた。暫らくして加へられた「御心配御無用」の六字は其夜數々の御馳走を生んだ。

×

巷に出てゐる人達には流石にお洗濯の場所と時間とが都合よくは行かない。

「この襦袢はね星の光で乾かしたのよ」

といふ聲もきく。包をぶら下げて本校に通ふ人もある、そんな人達には雨の夜は一つ心配の數が增す。

更衣室の四時半

×

「今日は私、破調の襦袢をきてるから極りが悪い」

「おや貴女は麻の葉趣味ね、襦袢も帶も。誰かの歌に「君がしめたる麻の葉の帶」ってのがあつたでせう」

「あゝもう袷をきるのも五日」

いろんな會話や獨言やが暗い部屋の中で踊つて居る。湯殿の白い湯氣の中に消えさる人、前髪をちよいと搔いて出てゆく人。

×

階上はロマンテック、階下はレアリテック、そのレアリテックな所にこそ階下の人の誇はある。納豆賣、唐辛子賣の面白いふれ聲や若い聲を出すから出て見たら老人だつたといふ花賣も來れば、ポコポン〳〵と鼓うちながら下駄の齒がへも來る。こゝに一月居れば、どんな藝なしでも大抵の雷落しには閉口しなくつていゝ。又夕暮など豆腐屋の小さいラッパが限りない情緒をそゝる。私はぢつと目を閉ぢたまゝ其波動が畫く淡彩の中に融けてゆく、夜は流しが通る。又芝居で聞く樣な若い女の奇麗な會話も窓から入つて來る。

「こゝが女子高等師範の寄宿舍だ」

と外的に私達を鞭撻してゆく人も少くない。かうした刺激の多い代りに階下の世界は天災地變のない國である。大風も土台を振ふ事は出來ない、地震だつて直ぐ飛び出せる、火事は見えないから安心だ。かうした純人間的生活がこゝに行はれてゐる。

×

ロマンテックの國は、雲の色や星の光りを觀照したり、本郷小石川に跨つて下瞰する天上の誇を有する國である。こゝには先生方のお住居もあり。唯一の娯樂所たる新聞室もある。夕食後などこゝから靜かなオルガンの音が聞える。

×

歸舍すると、みんなは帶にしめかへる、そして家に歸つた樣な落付いた氣分で机にも座れば針も持つ。n先生は

「こゝに來てからみんな大變女らしくなつて襖張

りまで致しますよ」

とにこ〳〵していらしつた。

×

食後の散歩は私達の娯樂の一つだ。夕轟きの町を離れた西片町を、から橋の邊から一週するのは本舍に居ては味ひ得ぬ所である。學者町の夕暮、薄明の光に表札を讀むのも一種の興味がある。時には靜かな琴の音も流れて來る。夢の樣なローマンスを思ひながら、はた勝手な熱を吹きながら二人三人、このゆかしい通を占領し得るは實に嬉しい。

×

默學の鐘がなる、暫くすると建物全体が沈默に入つて了ふ。世界はたゞ自分ある許り、稍獨座に近い感が得られないでもない。ハラリと返す頁の音、快く走るペンの音、其音に一輪ざしのひなげしがゆらぐ。この靜けさとこのロマンテックな花の匂とが、しつくり合つてこゝに森川町の夜の氣分があらはれる。あゝどうして牛町出れば瓦斯の灯がかがよふ電車道があると思へよう。

終りの鐘がなる。塵拂ふとて觸れる電燈の球のぬくもり。私達は顏を見合せて靜かに笑ふ。樂しげなさゝめきが洩れて來る、お隣か、食堂か、沈默は柔らかさとなつかしさとで色付けられる、而かも尙中心は依然として靜である、やがて消燈の偉大な深い沈默が、のつそりやつて來る、窓は一つ〳〵暗の中に融け去つて七時間の深い睡に入つ了ふ。(5·26.)(S)

(二)女子教育に關するもの

成瀨仁藏 女子教育 嵩山堂	明治二九	二	四〇
諸名士 教育大家女子教育論集 普及社	三〇	一一	五〇
○育成會 實驗教育叢書第四編 近世女子教育法 同文館	三二	二	二五
○下田次郎 女子教育 金港堂	三七	一二	二、〇〇
村上專精 女子教育管見 金港堂	三八	二	四五
澤田順次郎 女子教育論 讀賣新聞社	四〇	一〇	四五
○ラスキン原著 下田次郎譯 女子の本分 金港堂	四一	八	三〇
小野竹三 女子教育に就いて六合館	四二		二
西山悊治 お花は如何にして教育すべきか 金港堂	四四	七	三五
○谷本富 女子教育 實業之日本社	四四	一一	一、〇〇
フエネロン原著 大木太藏譯 女子教育論 金港堂			六〇

■愛知縣　土屋つね

一、名古屋史談（庵原小金吾）
　なごやまつり（伊勢門水）
　愛知縣紀要（愛知縣）
　愛知縣寫眞帖（愛知縣）
　愛知縣案内（名古屋經濟會）
二、無し
三、婦人會（松操會……松の操月刊）
　大正義會　一德會　市立第一幼稚園母の會
四、無し

■岩手縣　初鹿野とみ

一、鄕土の地理に關しては當地等は何等見るべきものも之無くやはり地名辭書位のものに候はん
　歷史は南部史要（原敬著）平泉誌などいふもの之有るのみ其他言語文學土俗等の編輯物なども見あたらず他に比して非常に未開の樣感じ申候
二、無し
三、社會敎育としては通俗講演會時々開かれ先日も久留島先生を聘し候其他は之無く候
四、習字は私は大体に於て校長先生の御說御もつともと存じ申し候
　イ、字體は楷　一體にては余に限られて不便ならずやと考へ居り候只三体までの必要はなく楷草の二體位にては如何にやと存じ候
　ロ、字の大さにつきては校長先生の御說の通りと切に存じ候されど新入學して一年間は生徒は大きく習はしむる方よろしからんと存じ候
　作文は自分が敎へて見て切に複雜なるをうるさく感じ申候校長先生の御說御尤と存し居り候

■山口縣　佐藤たみ子

一、柳井案内　神田靜江氏校閲　鎌倉孤燈編
　山口縣各地の分はそれ〳〵各校より報導あるべきと考へられ候につき當地の分丈申上候
二、無し
三、佛敎婦人會　放光婦人會　柳井婦人會は企圖中にて近々開かるゝ筈に候
四、習字は細字練習に重きを置き作文は國語敎科等と相關連して課するも下級生には書牘文の國語文を多くし上級生には普通文と半々にし其十分